

ダバ語紅頂 [Ngwirdei] 方言の音声分析と方言特徴

鈴木博之

1 はじめに

本稿では、ダバ語紅頂 [Ngwirdei] 方言の音声分析を行い、その方言特徴について基礎的考察を行う。

1.1 ダバ語概観

ダバ語は、中国四川省甘孜藏族自治州道孚県・雅江県境地帯¹、鮮水河流域で話されるチベット・ビルマ系の言語である²。自称では民族名が /^ɲda pi/ (ダバ人) で、地名が /^ɲda pa/ (ダバ) である。ダバ人は早くからチベット文化圏に属しているが、一方でダバ人固有の文化も今なお残している³。ところが現在となつては、自らの民族の来歴を知るものはいなくなってしまうという⁴。

ダバ語の分布地域は、楊嘉銘等 (1994) に簡単な報告があり、大きく見ると川西民族走廊の中心域に当たる。川西民族走廊に分布する少数言語群を川西走廊諸語と呼び、ダバ語もここに含まれる⁵。ダバ語が分布するあたりの鮮水河流域は峡谷をなし非常に険しく、地図上では近接しているに見える分布地域も、実際のところコミュニティ (村) 間の交流は密ではなく、それゆえそれぞれの村ごとに一定の方言差が確認される。主要交通路としては、道孚県城鮮水鎮と雅江県城河口鎮を結ぶものがもっとも規模が大きく、道孚県側にはさらに新龍県と、雅江県側には康定県と通じる道路がある。ただし往来は決して多くない。

¹1978年までは、この地域は八美鎮を県城とする乾寧県に属しており、現在の道孚県側が扎尕区、雅江県側は扎麦区となっていた。

²先行研究では、扎邛語 /Zhaba/ チャバ語などの名称で言及されている。

³この方面の紹介、研究は比較的多くなされている。言語と関わる議論をしているものに、馮敏 (2005) などがある。

⁴ダバ人の来源については林俊華 (2005) の議論がある。また、「ダバ」に相当する地名は、龔蔭 (1992) によると、清朝期の土司に関する文献において現代と対応する地域に「渣邛」として記録されている。

⁵この言語群はチベット・ビルマ語派の下位語群「羌語群 (孫宏開 (1983) などによる)」とされることが多いが、確定されているわけではない。

ダパ語の先行研究としては、黄布凡(1991)、黄布凡主編(1992)の扎拖[Bratho]方言、白井(2006a, 2006b)の仲尼[Gronyi]方言がある。

1.2 ダパ語の方言

ダパ語の方言区分はまだ十分に把握されているとはいえない。調査協力者の認識に基づくと、地域的観点から大きく2種、上ダパ/^hda^htɛ/ (ダテ)方言群と下ダパ/^hda^hmɛ/ (ダメ)方言群に分かれ、また(「郷」以下)村ごとに少しずつ方言が異なるという。この事情は先述のとおり、地勢に影響されるダパ人の居住地・交流の粗密性にもよると考えられる⁶。調査協力者による談話では、上ダパ方言の場合の方言差異は、陸続きにおいて南北の差異よりも鮮水河をはさんで対岸(東西)の差異が大きいという。詳しくは以下のように書くことができる⁷。

1. 上ダパ方言群

道孚県扎壩区鮮水河上流の5郷で用いられる諸方言を含む。北から順に掲げる。

- (a) 仲尼 [Grong-gnyis] /tʰo ŋi/郷
許比坎村、通角村、麻中村など
- (b) 扎拖 [Brag-thog] /tʰa tʰo/郷
瓦孜村、羅古村、扎貢村など
- (c) 紅頂 [sNgon-sdes] /ŋwi tʰdei/郷
地茹村、俄古村、向秋村など
- (d) 亜卓 [bZhang-rtsis] /za tʰsi/郷
各布村、莫洛村、烏拉村など
- (e) 下拖 [Bya-thang] /dza tʰo/郷
泥亜村、所達村、底亜村など

2. 下ダパ方言群

雅江県最北部の2郷で用いられる諸方言を含む。北から順に掲げる⁸。

⁶先に注記した土司について、土司ごとに言語もしくは方言が異なることは他の地域の事例などから容易に推定できる。龔蔭(1992)の記述には、「渣壩」を含む地名は6つあり、それらは以下に掲げる地名と名称がほぼ対応する。ここで土司名と現代の地名を併記しておく。上渣壩悪壘：紅頂、上渣壩卓泥：仲尼、中渣壩熱錯：亜卓、中渣壩沱：扎拖、下渣壩業洼石：下拖、下渣壩莫藏：木絨。悪壘、熱錯などはダパ語の音訳により近いと見られる。

⁷地名の後ろの[]はチベット名である。道孚県地名領導小組編(1986)、雅江県地名領導小組編(1987)などを参考にした。//はNgwirdei方言での形式である。

⁸雅江県については、どの村でダパ語が用いられているかという情報が不十分なため、ここでは村名は掲げない。

- (a) 木絨 [Mi-bzang] /-mu zo/郷
 (b) 瓦多 [Gru-rgan Chu-kha] /we to/郷

Ngwirdei 方言は、鮮水河東岸で話されている方言として、先行研究にある Bratho 方言、Gronyi 方言とは異なり、その点で新しい下位方言群の資料といえる。

1.3 本稿の構成

本稿の目的は、筆者が調査を行った Ngwirdei 方言の音声実態を把握し、その分析を行い整理し、音体系を素描することである。加えて、ダバ語が村ごとに少しずつ異なるということから、Ngwirdei 方言がどのような特徴をもっているのかを把握することである。

本稿では、まず Ngwirdei 方言の音声分析を声調、母音、子音に分けて行う。最後に、先行研究で言及される他方言の資料と対照することを通じて、どのような差異が見られるのかを考察する。

1.4 調査に関する情報

Ngwirdei 方言の主な調査協力者は、肖軍 [Dug-'dug] 氏（男性）で、紅頂郷地茹村の出身である。調査は 2004 年 8 月、2005 年 1 月および 8 月、道孚県皇城・鮮水鎮で行った。そのほか、Bratho 方言、Gronyi 方言、Zharts'i (巫卓) 方言についても、わずかであるが音声の記録と方言差異に関する情報を収集することができた。

調査内容は華侃 主編 (2002) や周毛草 (2003) に含まれる語彙 (約 2200 語) について 1 つずつ聞き取りを行うとともに、基本構文の聞き取りも行った。

2 Ngwirdei 方言の音体系

2.1 超分節音素

【声調】声調範囲の単位は基本的に語で、3 音節以上の場合は初頭 2 音節のみが弁別的である。以下の 5 つに分類される⁹。

調値 \ 調類	平 (下降)	上昇
高	高平 : -	高昇 : ~
中	中平 : -	中昇 : ^
低		低昇 : ^

⁹ 声調は表内の記号を語頭に付加して表記する

^md-, ^md_l-, ^mg-, ^mn-, ^mŋ-, ^mdz-, ^mz-

^mt^h-, ^mt-, ^mt_l-, ^mk^h-, ^mts^h-, ^mtʃ-, ^mtʃ^h-, ^mtʃ-, ^mʃ-

2. 前気音

^hp-, ^ht-, ^ht_l-, ^ht_l-, ^hk-, ^hc-, ^hk-, ^hts-, ^htʃ-, ^htʃ-, ^hs^h-, ^hs-, ^ht^h-, ^ht_l-, ^hʃ-, ^hʃ^h-, ^hʃ-, ^hm-, ^hm_l-, ^hn-, ^hŋ-, ^hŋ-, ^hŋ_l-, ^hŋ-, ^hl-

^hb-, ^hd-, ^hd_l-, ^hd_l-, ^hj-, ^hg-, ^hdz-, ^hdʒ-, ^hdʒ-, ^hz-, ^hz_l-, ^hɣ-, ^hm-, ^hn-, ^hŋ-, ^hŋ_l-, ^hl-, ^hl_l-, ^hw-, ^hj-

3. 口腔内調音子音

^pt^h-, ^pt-, ^pt_l-, ^pt_l-, ^pt^h-, ^pts^h-, ^pts-, ^ptʃ-, ^ptʃ^h-, ^ptʃ-, ^bd-, ^bj-, ^bdz-, ^bdʒ-

^ɸp-, ^ɸt-, ^ɸt_l-, ^ɸt_l-, ^ɸk^h-, ^ɸts-, ^ɸtʃ^h-, ^ɸtʃ^h-, ^ɸtʃ-, ^ɸs-, ^ɸʃ^h-, ^ɸʃ-, ^βd-, ^βd_l-, ^βj-, ^βg-, ^βdʒ-, ^βz-, ^βz_l-, ^βz-

^ɸp-, ^ɸt-, ^ɸt_l-, ^ɸk-, ^ɸts^h-, ^ɸts-, ^ɸtʃ-, ^ɸf-, ^ɸm-

^ft_l-, ^fʃ-, ^ft-, ^vd-, ^vj-, ^vz-, ^vr-

^wd-, ^wz-, ^wz_l-, ^wl-, ^wr-

^st^h-, ^st_l-, ^st-, ^ʃt-, ^ʃt_l-, ^ʃt-

^ʃp-, ^ʃt-, ^ʃt_l-, ^ʃc-, ^ʃk^h-, ^ʃk-, ^ʃts-, ^ʃtʃ-, ^ʃtʃ^h-, ^ʃtʃ-, ^ʃx-, ^ʃd-, ^ʃd_l-, ^ʃj-, ^ʃg-, ^ʃdʒ-, ^ʃm-, ^ʃn-, ^ʃŋ-, ^ʃŋ_l-, ^ʃl-, ^ʃw-

^ʒt-, ^ʒt_l-, ^ʒt_l-, ^ʒc-, ^ʒk-, ^ʒts-, ^ʒtʃ-, ^ʒtʃ-, ^ʒg-, ^ʒdʒ-

^xp-, ^xt^h-, ^xt-, ^xt_l-, ^xt_l-, ^xk^h-, ^xk-, ^xc-^xk^h-, ^xk-, ^xts^h-, ^xts-, ^xtʃ^h-, ^xtʃ-, ^xf-, ^xs^h-, ^xs-, ^xt_l-, ^xʃ-, ^xŋ-, ^ɣj-, ^ɣv-, ^ɣz-, ^ɣl-, ^ɣm-

^xt-, ^xt_l-, ^xc-, ^xk-, ^xts-, ^xtʃ-, ^xf-, ^xʃ-, ^ɣl-

4. その他

kt-, ʃt_l-, jz-, hm-, ^ʔt^h-, ^ʔz-, ^ʔl-

5. わたり音

tw-, k^hw-, kw-, tʃ^hw-, s^hw-, ɣw-, ɸw-, mw-, ŋw-

pj-, ʃj-, s^hj-, sj-, zj-, ʃj-, zj-, mj-, ŋj-, lj-, rj-

zɣ-, jɣ-

p^hr-, br-, βr-, wr-, s^hr-

6. 3子音連続

mbʒ-, βjʒ-, brdʒ-

ʰkʰw-, mɔdzw-, ʰpj-, ʰkw-, ʰmw-, ʰdʒ-, ʰgw-, pʰw-, ʰsj-, ʰsʰj-, ʰtʰw-, ʰdzj-, sʰw-, rɲw-, xtw-

2.4 音節構造

音節構造として2種類が認められる¹¹。

1. ^cC₁GV : 主子音構造

2. CCGV : 子音連続構造¹²

3 声調

3.1 種類と分類

声調のかかる単位は基本的に語を考慮することができる。まず、以下に音節数別の代表的なピッチの現れの例を掲げる。

声調	1音節例	2音節例	3音節以上
高平 : -	[S ⁵²]	[S ⁵⁵ S ⁴²]	[S ⁵⁵ S ⁵⁵ -]
高昇 : ~	[S ⁴⁵³]	[S ⁴⁵ S ⁵³]	[S ⁴⁵ S ⁵⁵ -]
中平 : -	[S ⁴²]	[S ³³ S ⁴²]	[S ³³ S ⁵⁵ -]
中昇 : ^	[S ³⁴²]	[S ³⁴ S ⁵³]	[S ³⁴ S ⁵⁵ -]
低昇 : ^	[S ²³¹]	[S ¹² S ³¹]	[S ¹³ S ³³ -]

声調は第2音節までが弁別的に機能すると考えられる。3音節以上が一単位で発音されるとき、3音節め以降は低くなる傾向にあり、[-S²¹]ほどの高さとなる。

2音節語の第1音節が声調の弁別的特徴をよく表している。1音節語の引用形式では、高平と高昇、中平と中昇の区別が不明確なことが多く見受けられる。

絶対語末（引用形式）、句末または文末において、ピッチの下降が見られるため、音声的には下降調の形式のように見えることが多い。2音節語のうちのいくつかは、2音節めが最初から [-S²²] というように低くなるものがあるが、表記上の区別は行っていない。

Bratho 方言では音節声調システムで分析されている（黄布凡1991）が、Ngwirdei 方言で音節声調を採用しないのは、以上のように2音節めの音声実現が高く始まる

¹¹この点に関する見解は、鈴木(2005a)のチベット語の分析に通じるものである。ダバ語に拡張できることを示した最初のもは、鈴木(2006a)である。

¹²ただしGの位置にわたり音が現れない例が若干あるが、これらもここに含める。

ことが多く比較的一定して現れ、語全体で声調の型が決まっているように見られることによる。ただし、複音節語において音節ごとに意図的に不自然なほどゆっくり発音してもら場合、各音節が独立した声調を持つように観察されることもある¹³。

3.2 具体例

以上の分類について、Ngwirdei 方言の具体例を簡略音声表記で掲げる¹⁴。

声調	1 音節	2 音節	3 音節以上
高平：-	[no ⁵²]「あなた」	[mə ⁵⁵ lei ⁴²]「ぬか」	[mə ⁵⁵ x ⁵⁵ tso ⁵⁵ ma ²¹]「汚い」
高昇：^	[wɔ ⁴⁵³]「年」	[mi ^{45b} ɕo ⁵²]「单身」	[ŋa ⁴⁵ t ^h u ^{55m} ba ²¹]「とても」
中平：-	[mi ⁴²]「矢」	[mɔ ^{33b} ti ⁵³]「真珠」	[mə ^{33h} t ^h e ⁵⁵ ze ²¹]「哀れな」
中昇：^	[na ³⁴²]「我々」	[mi ²³ ɾla ⁴²]「バター」	[ma ³⁴ ja ^{55p} pu ²¹]「ポプラ」
低昇：^	[mi ²³¹]「母親」	[me ¹² zu ³¹]「火薬」	[na ^{13f} di ^{33f} di ¹¹]「真っ黒の」

以上の声調は、引用形式でもっとも明瞭に聞き分けられる。文中では、特にピッチについて必ずしもすべての語に以上のような対立が明瞭に現れるわけではない。このことはイントネーションの分析や考察ともかかわり、詳細な考察は別の機会に行うことにする。

4 母音

音声的には非鼻母音、鼻母音、息漏れ音などが現れる。

鼻母音は、チベット語や漢語からの借用語に見られるほか、音声的には先行子音または後続子音に鼻音が含まれるものに現れるが、いずれも音韻的には機能していないと考える。

息漏れ音は低昇調に付随して現れ、先行する子音もやや息漏れを伴うのが特徴であるが、音韻的には機能していないと考える。

長母音は語調などに影響され音声学的に観察されるが、音声学的自由変異である。

4.1 単母音

音声実現が不安定な母音もあるため、代表音を注記しておく。

¹³ 声調の分析において、動詞については接頭辞との関連で以上のような語声調による分析が適用できない場合がある。現象としては、接頭辞の種類によっては接頭辞と語根が独立の声調の型をとるように見える。この点に関しては現在調査分析途上であるため、稿を改め論じることとする。

¹⁴ 調値も各語の音声実現を与える。分節音によって多少調値が左右されるため、先に与えた代表的調値とずれがある。

/i/ : [i, i̇, ɪ]	/a/ : [a, ȧ, ʌ]	/u/ : [u, u̇]	/ʉ/ : [ʉ, ʉ̇]
/e/ : [e, ɛ]	/ʌ/ : [ʌ, ʌ̇, ʏ]	/ɯ/ : [ɯ, ɯ̇]	/ə/ : [ə]
/ɛ/ : [ɛ, ɛ̇]	/o/ : [o, ɔ]	/i/ : [i, ɪ, ɪ̇]	/ə/ : [ə, ɜ]

/i/の音声実現は環境による変異音を含む。[ɪ̇]は歯茎音の後、[ɪ]はそり舌音の後に現れる。

	例語	語義	例語	語義
i	˘ji	口	˘sh̥i	小麦
e	˘je	家	˘ʃte	クッション
ɛ	˘sh̥ɛ	薪	˘h̥nɛ	鼻水
a	-wa	ぶた	˘sta	虎
ʌ	˘na	火	˘la	アブ
ʌ	˘nda	十分である	˘ŋʌ	きのこ
o	˘do	友人	-zo	ゾ (ヤクと牛の子)
u	˘lu t ^h ej	風	˘gu	丘
ɯ	˘k ^h ɯ	犬	˘sh̥ɯ	誰
i	˘tsi	裸麦	˘ri	山
u	˘tu ^h tu	乾いた	˘ndui	胃
ə	˘ge wo	家畜	˘pə ⁿ di	太もも
ə	˘ʃɛə	星	˘ɕə rə	骨

4.2 二重母音

Ngwirdei 方言の場合、どのような音声実現に対して「二重母音」と考えるのかは非常に難しい。その原因は、調音上の調音点との接近性によってわたり音 j や w と同様の微弱な摩擦を伴うものと、母音としての聞こえが高い場合とが自由変異をしばしば起こすからである。

このような変異が見られる実際の音声実現としては、「強弱」パターンと「弱強」パターンがあるといえる。「強弱」パターンで弱部分の調音上の接近性の高いものは「単母音+わたり音」と変異し、「弱強」パターンで弱部分の調音上の接近性の高いものは「わたり音+単母音」と変異し、どちらも不安定である。ここでは後者は子音連続として扱い、前者に対応するものおよび一定した聞こえで実現する母音の連続を二重母音として¹⁵、以下に例を挙げる。

¹⁵ただし、表記上聞こえの違いから/ai/とも/aj/とも書くことがあるが、末尾にわたり音を記述しても、本稿では末尾子音とはみなさない。

	例語	語義	例語	語義
ai	ˈmai ^h ma	植物油	ˈts ^h aj ts ^h a	野菜
ei	ˈjwei	ジャッカル	ˈwei na	小腸
ei	ˈtɛi	1	ˈxpei	領主
ui	-ɸpui	お香	ˈwo ^h kui	満腹になる
ui	ˈgmi	9	-kui tɛi	サテン
ui	-s ^h ui	夫	-tɛi	雁
oi	ˈs ^h re mɔi	薪拾いをする		
oi	ˈts ^h ɔi	10	-ts ^h i ^h dɔi	14
ie	ˈɕie	下痢する		
ue	-pue	持っている		
ue	-t ^h ue	適切な	ˈtɛe	南
ea	-b ^h dzea ^h lu	とり年	ˈs ^h ea t ^h i	火箸

5 子音

子音は音節初頭について、単子音、2子音連続、3子音連続が見られる。

5.1 単子音

Ngwirdei 方言では閉鎖音および破擦音の系列が比較的豊富である。ただし、*ɸ*類（前部硬口蓋閉鎖音）と *c*類（硬口蓋閉鎖音）は、いくつかの例では音声学的に自由変異音となることがあるが、多くはそれぞれ独立している。また、いくつかの音素は単独で出現せず子音連続の構成要素としてのみ現れうる。

具体例を可能な限り2例ずつあげる。単子音としては現れない（子音連続の構成要素としてのみ現れる）ものには例が記載されていない。

5.1.1 閉鎖音

閉鎖音の無声無気音はしばしば半有声音として実現されるが、有声音とは有声性において異なり、区別されうる。

前部硬口蓋閉鎖音と硬口蓋閉鎖音は、いくつかの語で音声的に混同されることがある。以下にあげる例は混同の起こらないものである。

	例語	語義	例語	語義
p ^h	ˈp ^h ɔ ^h bi	こじき	ˈp ^h i	父
p	ˈpɔ ^h du	子供	ˈpo ro	蟻
b	ˈba ^h do	罰する	ˈbo rge	嚙唾者

t ^h	t ^h o zi	子山羊	t ^h a βu	まわり
t	tə	水	t ^h ɔ ɲu	誤った
d	də zi zi	美しい	də ɲdə	笑い話
t ^h	t ^h a t ^h a	傷跡	t ^h e go go	ミルクティー
t	t ^h i	筋	t ^h i	ヤク
d	də zɑ	翼	d ^h u hku	飼い葉おけ
t ^h	t ^h a t ^h a	密な	t ^h ue ta	市場
t	t ^h uj	野鴨	t ^h o da h ^h tse mo	毛皮ジャケット
d	d ^h o d ^o	かつぐ	d ^h i d ^h e kə	蛙
c ^h	c ^h i t ^h i	様子	c ^h ia c ^h i c ^h ja	散会する
c	c ^h e ma	紙	c ^h ka t ^h mə ci	問う
t	t ^h e le	道	t ^h o ɲge ji h ^h tu	反対する
k ^h	k ^h o h ^h te	背中	k ^h u bu lo	ふくろう
k	kə h ^h tse	炭	k ^h u t ^h se	芯
g	ge zī	子牛	-gə zja	櫛
ʔ	ʔo t ^h o	火葬	ʔa h ^h ka	ありがとう

5.1.2 破擦音

t_ɕ系列の破擦音は、通常の発話では基本的にそり舌性を伴う発音がなされているが、引用形式で丁寧に発音する場合、そり舌音を含むと許容されないことがある。無声無気音の場合、調音点上の自由変異音として [t_ɕ, t_ɕ^h, t_ɕ^h] が見られる。そり舌破擦音 [t_ɕ] は許容されない。

	例語	語義	例語	語義
ts ^h	-ts ^h a wu	甥	-ts ^h ɛ	ヤマアラシ
ts	tse ma	砂	-tsə h ^h bu h ^h ti	みみず
dz	dzu ma	偽の	dza t ^h i	ヒグマ
t _ɕ ^h	t _ɕ ^h a	街道	t _ɕ ^h ɔ ɲə	酒
t _ɕ	-t _ɕ u	たて穴		
dz	dzi	鉄の鋏		
t _ɕ ^h	-t _ɕ ^h o ci	秋	-t _ɕ ^h ɛ	やぎ
t _ɕ	t _ɕ i h ^h ni	朝食	t _ɕ e ko	キッチン
dz	dzi me	秤		

5.1.3 摩擦音

歯茎音、後部歯茎音、そり舌音、前部硬口蓋音、硬口蓋音には有気/無気の弁別がある。

	例語	語義	例語	語義
ɸ	ˈɸu tso	唐辛子	ˈɸu bje	皮の袋
β	ˈβa ts ^h e	予測する	ˈt ^h a βu	周り
f				
v				
s ^h	ˈs ^h a	呼吸	ˈs ^h i	小麦
s	ˈse bæ ta	うさぎ	ˈsa zi	アブ
z	ˈza m ^h u	娘	ˈzə le	瑪瑙
t ^h				
t	ˈte βza	月	ˈtə	神
ʃ	ˈnə nə ʃo ^h kui	乳をやる	ˈwei ʃa	烏拉 (村名)
ʃ ^h	ˈʃ ^h ə t ^h e	真夜中	ˈʃ ^h u tɕ ^h i	ほとんど
ʃ	ˈʃi	畑	ˈʃi to	果物
ʒ	ˈʒe zi	こうもり	ˈʒe s ^t ɕi m ^h bi	かたつむり
ʂ ^h	ˈʂ ^h i ʂ ^h i	長い	ˈʂ ^h a	箸
ʂ	ˈʂi ʂi	黄色い	ˈk ^h e ʂu	口唇裂
ɕ ^h	ˈɕ ^h i	鉄	ˈɕ ^h a tɕ ^h i	獵犬
ɕ ^h	ˈɕ ^h a t ^h e	鬼		
ɕ	ˈɕi də	川	ˈɕm βu ^h go	鳩
ɕ	ˈɕə rə	骨	ˈɕu ^h pu	おす牛
ʒ	ˈʒe mi	雹	ˈʒi to	穀物
x	ˈxe le	今回	ˈxa t ^h e	覆う
ɣ	ˈɣu	終える	ˈɣa po	あふれる
h	ˈho ^h gu	木製の盆	ˈha ʃi mu	くしゃみをする
ɦ	ˈɦo ma	乳		

5.1.4 共鳴音

無声鼻音はしばしば無声前気音を伴い、単独で現れる例は少ない。以下にあげる語の中にも、無声前気音を伴えるものが含まれる。

r音は自由変異として [z] のように摩擦音になりうる。

	例語	語義	例語	語義
m	ˈmo ^h ku	雨	ˈmi	母
m̥	ˈm̥e	薬	ˈŋə m̥e m̥e	思う

n	ne ^h zi	穂	no bje	外
ŋ	ŋa ^h ŋa	深い	ŋo ^m ŋi ^m ŋi	におう
ŋ	ŋe lo	ごま	ŋe ^h da	清める
ŋ	ŋa ra	耳	ŋu me	太陽
ŋ	ŋu ^h ŋu	切り立った	ŋi mi ^h ŋə ŋə	毎日
ŋ	ŋu ^h ju	鼻	ŋi	銀
l	li	湿った牛糞	lu ^m ba	谷
l	le	蒸しパン	lu	取っ手
r	ro ŋo	上のほう	ri ra	茶
w	-wa	ぶた	wo s ^h e	光
j	ji	口	je po	石

5.2 2子音連続

2子音連続は、そのタイプとして、先行子音の特徴によって次のように分類できる。

- | | | |
|--------|---------|---------|
| 1. 前鼻音 | 4. 唇歯音 | 7. 軟口蓋音 |
| 2. 前気音 | 5. 歯茎音 | 8. わたり音 |
| 3. 両唇音 | 6. そり舌音 | 9. その他 |

このうちのいくつかは発音様式における区別をもち、それをここでは音節構造上の違いに還元して解釈しているが、音声学的には初頭子音から明瞭に発音するものと、そうでないもの（多くは第2子音を中心に発音）に分かれる。前者は単に子音を並列し、後者は初頭子音を小さく肩に乗せて示している。詳細は鈴木(2005a)を参照。

特に両唇閉鎖音を第1要素にもつ子音連続は、二重調音に近い調音方法で実現される。

Ngwirdei 方言に現れる子音連続は、調音方法のみならずその異音の多さにも特徴づけられる。初頭子音が弱く発音される、前鼻音・前気音を含まない子音連続の場合、いくつかは自由変異として前気音になりうる。また、口腔内調音子音を第1子音に持つものは、その調音点が互いに入れ替わる例も確認される。いずれの変異も、主に発話の速度や丁寧度に影響されていると判断できる。

ここでは子音連続の構成を、各語の引用形式において区別される要素を認定し、その組み合わせと具体例をあげていく。以下、具体例を2子音連続で初頭子音について前鼻音、前気音、唇音、舌尖音、軟口蓋摩擦音、その他、そしてわたり音と分けて述べる。

5.2.1 前鼻音

前鼻音には調音点が後続子音と一致するものとしなない（両唇音で現れる）ものがあり、調音点が一致する完全な前鼻音は閉鎖音・破擦音・摩擦音に先行しうる。

鼻音部の調音点が両唇音のものの中には前鼻音でなく明瞭に発音し子音連続を構成するものが若干見られる。それもここに含める。

調音点が一致するもの

^m b : ^m bi 馬鹿な	^h t ^h : -d ^o ^h t ^h e 泳ぐ
ⁿ d : ⁿ di 舌	^h t : ^h fi ^a ^h t ^o 刻む
^h d : ^h d ⁱ 丸太	^h t ^h : - ^h t ^h ue 適合する
^h d : ^h de to to γu 門をする	^h t : ^h fi ^h fi 若い
^h j : ^h je クッション	^h ch : -t ^o ^h ch ⁱ 売る
^h g : ^h g ^o mi 岩石	^h k ^h : ^h k ^h o 鍵
^h dz : ^h dzi ^h dzi 遠慮深い	^h ts ^h : - ^h ts ^h a re スープ
^h dz : ^h dza 糸	^h ts : ^h fi ^h tsui 染める
^h z : ^h ze ^h zu 食物を避ける	^h t ^h : ^h to ^h t ^h a 1000
^h z : ^h ze ^m bu 和やかな	^h t ^h : ^h t ^h o lo 碗
^m p ^h : ^m p ^h e 氷	^h t ^h : ^h ma ^h t ^h e go ^h t ^h e 疑う
^m p : ^m p ^o ^h je 発展する	^h t : ^h ta ^h ta 揺れる
^h t ^h : ^h t ^h e 肉	
^h t : ^h ka ^h te fia さえぎる	

鼻音部が m-のもの

^m d : - ^m do k ^h a 色	^m k ^h : ^m k ^h e ^m ba 専門家
^m d : ^m d ^e 米	^m ts ^h : - ^m ts ^h ui na 染料
^m g : ^m ga ra 鍛冶屋	^m t ^h : ^m t ^h i 底
^m n : ^m na ŋo ŋwəj 誓う	^m t ^h : ^m t ^h o ste 白塔
^m ŋ : ^m ŋi fio 老婆	^m t ^h : ^m t ^h e ^h pi 脾臓
^m t ^h : ^m d ^o ^m t ^h o 馬籠頭	^m ŋ : ^m ŋo ^m ŋi ^m ŋi におう
^m t : ^m ko ^m ti のりづけする	^m dz : ^m fi ^o ^m dz ^u 詰め物をする
^m t ^h : ^m za ^m t ^h u 娘	^m z : -go ^m zi 刺さる

5.2.2 前気音

前気音は、ほとんどの例で後続子音と有声性に関して一致する。一致していないものは鼻音・流音について見られ、「無声前気音+有声鼻音」などの組み合わせが見られる。

前気音を伴う鼻音の発音は、時に前気音部も鼻腔共鳴を伴い、聴覚印象として鼻音を長く発音したように聞こえることもある。

前気音が無声音のもの

$^h p$: $^h p\epsilon$ $^n di$ 大腿	$^h t$: $^h \eta \Delta$ $^h \eta a$ 残される
$^h t$: $^h ta$ $^r ga$ くるみ	$^h f$: $^r we$ $^h \eta \epsilon$ 露
$^h t$: $^h \eta a$ $^h \eta i$ 落ちる	$^h \epsilon^h$: $^h \eta a$ $^h \epsilon^h i$ 溶かす
$^h t$: $^h \eta o$ $^h \eta i$ ベルト	$^h \epsilon$: $^h \eta o$ $^h \epsilon i$ 引っぱる
$^h c$: $^h cu$ 洞穴	$^h m$: $^h mi$ $^h mi$ 毎晩
$^h k$: $^h ku$ $z\epsilon$ ろば	$^h m$: $^h \eta a$ $^h mi$ 飲み込む
$^h ts$: $^h tsi$ $^h gu$ $^s t\epsilon^h i$ 冬	$^h n$: $^h no$ 脳
$^h t\epsilon$: $^h \eta o$ $^n \eta u$ $^h t\epsilon w$ 乱す	$^h \eta$: $^h \eta \epsilon i$ 7
$^h t\epsilon$: $^h t\epsilon o$ $^x ts^h e$ つば	$^h \eta$: $^h \eta i$ 蒸気
$^h s^h$: $^h t\epsilon$ $^h s^h i$ 積み上げる	$^h \eta$: $^h k\epsilon$ $^h \eta i$ 物を借りる
$^h s$: $^h se$ $^h pa$ ra 木の板	$^h \eta$: $^h \eta a$ 呪文
$^h \eta^h$: $^h ta$ $^h \eta^h \epsilon$ 倒す	$^h l$: $^h da$ $^h la$ 閏月

前気音が有声音のもの

$^n b$: $^n bu$ ηli 笛	$^n \gamma$: $^n \eta o$ $ts^h i$ 帽子
$^n d$: $^n do$ $^n di$ 草木の灰	$^n m$: $^n mo$ 死体
$^n d$: $^n da$ ja 仇	$^n n$: $^n ne$ 2
$^n d$: $^n da$ 漢族	$^n \eta$: $^n \eta i$ lo 倍
$^n j$: $^n \eta \epsilon i$ 8	$^n \eta$: $^n \eta \Delta$ きのこ
$^n g$: $^n ge$ 牛	$^n l$: $^n a$ $^n la$ 豆
$^n dz$: $^n dze$ $^n dza$ 爪	$^n r$: $^n zi$ $^n ga$ $^n de$ $^n ri$ 巻く
$^n d\zeta$: $^n te$ $^n \eta a$ $^n d\zeta o$ 解放させる	$^n l$: $^n ta$ $^n \eta i$ 正方形の箱
$^n d\zeta$: $^n d\zeta i$ 100	$^n w$: $^n we$ le 乾いた牛糞
$^n z$: $^n k\epsilon$ $^n zi$ 秘密を守る	$^n j$: $^n jo$ $^n mu$ 下女
$^n z$: $^n za$ 尿	

5.2.3 先行子音が唇音

基本的に子音連続の構成要素間で有声性が一致する。

両唇閉鎖音は閉鎖音・破擦音に先行しえ、その調音方法は後続子音との同時調音に近い。文中に現れると子音連続としてやや明瞭に確認できる。

両唇閉鎖音のもの

p^h : $\sim p^h e$ 印鑑	pt^e : $\sim \eta o p^t e a$ ゆるくなる
pt : $\sim me go p^t i$ 竹ざお	$pt^e h$: $\sim t o p^t e h a$ 破壊する
p^h : $\sim \eta i o p^h u$ レンガで作る	pt^e : $\sim p^t e a$ 北
pt : $\sim ko p^t e \eta a$ 壊れた	$b d$: $\sim j e b d e \eta i u$ う年
p^h : $\sim ko p^h i$ 鈍い	$b j$: $\sim \eta a b j i$ 越える
$pt^s h$: $\sim \eta o p^t s h i \eta a$ 切開する	$b d z$: $\sim b d z e a \eta i u$ とり年
pts : $\sim p^t s e$ 橋	$b d z$: $\sim t h i g a b d z e$ 1対の牛

両唇摩擦音・接近音のもの

ϕp : $\sim \phi p o$ 草地	ϕf : $\sim k o \phi f e$ 退屈な
ϕt : $\sim \phi t i \phi t i$ まっすぐな	ϕm : $\sim t o \phi m a$ 忘れる
ϕt^h : $\sim t s^h a b e \phi t^h o w a$ 来世	βd : $\sim \beta d u$ 悪魔
ϕt : $\sim \phi t a \zeta i$ 吉祥	βd : $\sim \eta i a \beta d a$ 固定する
$\phi t s$: $\sim \eta i a \phi t s a$ 搾る	βj : $\sim \eta a \beta j i$ 越える
$\phi t^e h$: $\sim t o p^t e h a \phi t^e h u$ 破壊させる	βg : $\sim \zeta a \beta g o$ 盲人
$\phi t^e h$: $\sim \phi t^e h i \phi t^e h i$ 細い	$\beta d z$: $\sim \eta i a \beta d z a$ 膨張する
ϕt^e : $\sim \phi t^e i w e$ 小麦粉	βz : $\sim \beta z o p^t w a k o$ 工場
ϕs : $\sim \phi s o w e$ 焼香	βz : $\sim t o \beta z e$ 播種する
ϕj^h : $\sim t a \phi j^h i \phi j^h i$ すすぐ	βz : $\sim t o \beta z e$ ばらまく
$\phi \zeta$: $\sim \phi \zeta i$ 歩く	βr : $\sim t s^h i t s^h i t a \beta r e$ 退く
ϕp : $\sim \phi p u i$ お香	$w d$: $\sim w d e m b a$ 正直な
ϕt : $\sim \phi t o$ 恐れる	$w z$: $\sim w z o$ 銅
ϕt : $\sim \phi t o$ 仕掛け罫	$w z$: $\sim w z i$ 雪
ϕk : $\sim \phi k o d e$ しゃっくりする	$w z$: $\sim t o w z i$ 暖める
$\phi t s^h$: $\sim t a \phi t s^h i$ 跳ねる	$w l$: $\sim w l e m e$ ラマ
$\phi t s$: $\sim \phi t s e b e$ 肺	$w r$: $\sim w r a h c u$ 洞窟
ϕt^e : $\sim t a \phi t^e o$ 今すぐ	βr : $\sim \eta i a \beta r i$ 腹が張る

唇歯音のもの

^h f : ^h fi ^h ti ^h ti より分ける	^v f : ^v fi ^v ja なくす
^f ɕ : ^f ta ^f ci 引きずる	^v ʒ : ^v ta ^v ʒe ^v ʒe 撒く
^{ft} : ^{ft} fi ^{ft} te 押さえる	^v r : ^v fi ^v re 掘る
^v d : ^v ka ^v da 折れる	

5.2.4 先行子音が舌尖音

基本的に子音連続の構成要素間で有声性が一致する。
歯茎音を初頭にもつ子音連続はわずかである。

歯茎音のもの

^s h : ^s te 指貫	^{ht} : ^{ht} te ^{ht} ta 1セット
^ʃ : ^ʃ ko ^ʃ tui 去勢する	^h : ^h pu ^h lo くびき
^ʔ t : ^ʔ ta ^ʔ tu へそ	

そり舌音のもの

^ɸ p : ^ɸ ta ^ɸ pa ^ɸ pa ^ɸ tɕ ^h u 混ぜる	^{stɕ} : ^{stɕ} te 星
^ɸ t : ^ɸ dzu ^ɸ ta ブーツ	^{stɕ} : ^{stɕ} ta ke li 磁石
^ɸ ʃ : ^ɸ ta 淹れる	^ɸ d : ^ɸ wi ^ɸ dej 紅頂 (地名)
^ɸ c : ^ɸ ce ^ɸ dzu ^ɸ p ^h e 翻訳家	^ɸ d : ^ɸ fi ^ɸ do 投げる
^ɸ k ^h : ^ɸ da ^ɸ k ^h e 清算する	^ɸ ʒ : ^ɸ ts ^h e ^ɸ ʒe 18
^ɸ k : ^ɸ ku ma 泥棒	^ɸ g : ^ɸ go ハリネズミ
^ɸ ts : ^ɸ ra ^ɸ tsa 脈	^ɸ dʒ : ^ɸ dʒa ^ɸ ts ^h u 海
^ɸ tɕ : ^ɸ wu ^ɸ tɕi 掛ける	^ɸ z : ^ɸ ts ^h a ^ɸ ts ^h a ^ɸ zu 辛い
^ɸ tɕ ^h : ^ɸ fi ^ɸ tɕ ^h a 開ける	^ɸ m : ^ɸ ka ^ɸ mə ci 尋ねる
^ɸ tɕ : ^ɸ tɕi ka 縄	^ɸ n : ^ɸ ka ^ɸ ne 住む
^ɸ x : ^ɸ fi ^ɸ xaj ほとぼしる	^ɸ ŋ : ^ɸ fi ^ɸ ŋi ^ɸ ŋi なだめる
st : st te 雲	^ɸ ŋ : ^ɸ du ^ɸ ŋe 苦しみ
st : st ta 肝臓	^ɸ l : ^ɸ ko ^ɸ lo ɸa ta 曲がる
st : st to st ti ベルト	^ɸ w : ^ɸ we 霜
^{sc} : ^{sc} ce mo 衣服	^{rg} : ^{rg} bo ^{rg} e 聾啞者
^{sk} : ^{sk} ku ^{sk} ts ^h e こぶし	^{rdʒ} : ^{rdʒ} to ^{rdʒ} o 投げる
^{sts} : ^{sts} ka ^{sts} te ^{sts} te つなぐ	

5.2.5 先行子音が軟口蓋摩擦音

基本的に子音連続の構成要素間で有声性が一致する。

$^x p$: $^x pa$ fiə 英雄	$^x t$: $^x tu$ $^h dzɛ$ po 竜王
$^x t^h$: $^h kə$ $^x t^h ə$ 切る	$^x ɕ$: $^x ɕo$ lo 投石器
$^x t$: $^h dzi$ $^m ba$ ŋo $^x to$ 布施を行う	$^x ŋ$: $^h ga$ $^x ni$ 熱する
$^x t$: $^x to$ $^h ta$ 称える	$^x t$: $^h xti$ $k^h a$ 鉱石
$^x t^h$: $^h to$ $^x t^h u$ 彫刻する	$^x t$: $^h ga$ $x tu$ 水で混ぜる
$^x t$: $^h pa$ $^x ta$ $kə$ lo 魔法瓶	$^x c$: $^h xce$ 利息
$^x c$: $^h xco$ $^h tɕo$ 忙しい	$^x k$: $^h xku$ bu $lə$ にんにく
$^x k^h$: $^h zo$ $^x k^h a$ ma 子なしのめす ヤク	$^x ts$: $^h ʔə$ $x tsi$ 蹴る
$^x k$: $^h ke$ zi 乾燥地	$^x tɕ$: $^h x tɕe$ $^n dze$ 野獣
$^x ts^h$: $^h ŋa$ $^x ts^h i$ $^x ts^h i$ 恐れさせる	$^x f$: $^h xfo$ 膿
$^x ts$: $^h x tse$ $ɕa$ 花椒	$^x ɕ$: $^h kə$ $x ɕu$ 買う
$^x tɕ^h$: $^h -ŋa$ $^x tɕ^h a$ ほどく	$^h j$: $^h ʔje$ wo 弾
$^x tɕ$: $^h x tɕa$ go $^h go$ 暖かい	$^h v$: $^h ʔvei$ 腹
$^x f$: $^h ko$ $^x fi$ 炒める	$^h z$: $^h ʔzu$ $^h pu$ 体
$^x s^h$: $^h x s^h e$ 穴あけ機	$^h l$: $^h ʔlm$ 歌
$^x s$: $^h x su$ 体毛	$^h m$: $^h ko$ $^h mo$ 盗む
	$^h l$: $^h bu$ $^h li$ 笛

5.2.6 その他

以上の分類から漏れるもので、組み合わせとして例外的なものと思われる。

kt : $^h kta$ 痕跡	$^h t^h$: $^h ʔə$ $^h t^h e$ 鞭打つ
$ɕt$: $^h ɕta$ $^h li$ 熱い	$^h z$: $^h ŋo$ $^h zu$ 育てる
jz : $^h ta$ jzi 這う	$^h l$: $^h ʔlo$ $^h to$ 方法
hm : $^h ko$ $hmə$ 盗む	

5.2.7 わたり音

-w, -j, -ɣ, -r の4種類に分類される¹⁶。

¹⁶ -w および -j については、動詞・助動詞について形態変化から、以下にあげる例よりも多く見られると考えられる。詳細はまだ十分調査していない。

-w のもの

tw : ʼtwa ^ɹ dzu 鋤	ɣw : ʼtuɣwa 経る
k ^h w : ʼk ^h wi tɕ ^h wu ひづめ	fiw : ʼta fiwe しおれる
kw : kwa ^h co 締める	mw : ʼfia mwi 閉める
tɕ ^h w : ʼtɕ ^h wi 1元 (通貨単位)	ɣw : ʼɣwi 5
s ^h w : ʼs ^h wi la 隊列	

-j のもの

pj : -ka pja 腐る	zj : ʼzje s ^h o あさって
tj : ʼtɕ ^h a mba ʼtja 風邪を引く	mj : ʼmje ^h pu 証明する
s ^h j : ʼs ^h je 黄羊	ɲj : ʼɲjə ɲjə 青い
sj : ʼsja le のこぎり	lj : ʼ ^h ko ^ɹ do lja 安い
zj : ʼjo zje 単独の	rj : -ka mbi rja 完全である
ɕj : -ɕje ^h tɕi 恨む	

-ɣ のもの

zɣ : ʼzɣe 夏	jɣ : ʼta jɣe 行く
-------------	-----------------

-r のもの

p ^h r : ʼp ^h re te 今すぐ	βr : ʼko βre βro 抱きしめる
br : ʼfia bre 増える	s ^h r : ʼs ^h re ^h pu 木

5.3 3子音連続

わたり音を含まないもの

m ^b z : ʼko m ^b zu 娶る	brdɕ : -ta brdɕo 投げる
βjz : ʼco βjzi 仲間にする	

3子音めがわたり音であるもの

ʰk ^h w : ʼʰk ^h wi 溝	ʰmw : ʼ ^h mwe カラスムギ
m ^d zw : ʼtə m ^d zwi 飛ぶ	ʰdj : ʼfia ʰdja なくす
ʰpj : ʼ ^h pja ʰk ^h u 狼	ʰgw : ʼtə ʰgwa ゆがんだ
ʰkw : ʼfia ʰkwi 渡る	p ^t w : ʼβzo p ^t wa ko 工場

ʰsʰj : ʰsʰje	知っている	sʰw : ʰsʰo ŋo sʰwi	救う
ʰsj : ʰsja ŋgo	帽子	ŋjw : ʰtsʰe ŋwi	15
ʰtw : ʰto ʰtwa	衝撃を受ける	xʰw : -xʰwi	1角 (通貨単位)
ʰdzj : ʰdzja	鶏		

6 Ngwirdei 方言の特徴

ここでは、2つの観点からの考察を行う。

1つは、以上に音声分析を行って得られた Ngwirdei 方言における音体系について、先行研究と見比べてどのようなことが Ngwirdei 方言に特徴的か検討する。ただし声調に関しては、分析手法が異なるため扱わない。対照する資料には、黄布凡 (1991) および白井 (2006a, 2006b) を用いる。

もう1つは Ngwirdei 方言における語彙のうち、チベット語と漢語に関係がある借用語に関して、その語彙形式の考察を行う。チベット語来源借用語における語彙形式の考察は、主に蔵文と周辺の現代チベット語諸方言との対照を行い、ダパ語の上位言語としていかなるチベット語方言が存在したかを考える。ダパ語などのように歴史的に言語自体の記録がないものについては、チベット語の形式をたよりにして歴史的な考察ができるだろう。漢語に関しては、最近のダパ語と漢語の併用によって起こりうる事例についての扱いについてまとめる。

6.1 音素体系

先に分析したとおり、Ngwirdei 方言の音体系は非常に複雑であることが分かった。それに比べると Bratho 方言ではそれほど複雑とはいえない。しかしながら、このような違いは分析を行う研究者の姿勢によって大きく変わるものであるから、その影響を差し引いて考える必要がある。ただし、明らかに異なる点も見受けられるため、それは体系上の異なりとして扱うことに一定の意義が存在すると考えられる。

6.1.1 母音

単母音について、調音点に関して音素として認められる種類と数が各方言で異なっている。たとえば Bratho 方言には /i/ と /ɪ/、/u/ と /ʊ/ という対立が報告されているが、いずれも Ngwirdei 方言では対立しておらず、加えて /a/ と /ɑ/、/ə/ と /ʌ/ という組が Ngwirdei 方言では弁別されている。

また二重母音が数種類あるのは Ngwirdei 方言・Bratho 方言に共通で、Ngwirdei 方

言ではほとんどが舌の位置の上昇形 (-i もしくは -e で終わる) の組である。Gronyi 方言では二重母音という形式は見られない。

黄布凡(1991)および白井(2006a, 2006b)の分析とまったく異なるのは鼻母音の認定である。鼻母音を含む例を見る限り、借用語に現れる要素と見られる。筆者の調査でも、さまざまな借用語が見受けられ、鼻母音を含む例もいくつか存在した。ところがこれらはすべて鼻音要素を脱落させてもよく、むしろ自然発話ではそのようにするのが普通で、一方特に漢語来源借用語の場合は漢語特有の発音を維持してダパ語文に現れることができる。このことから筆者はこれらを借用語とみなさず、音素設定のための考慮は行っていない。詳細は、漢語来源借用語の項を参照。

6.1.2 子音

Ngwirdei 方言に特徴的な音素には、 $ʰ$, f , $ɸ$, $tɕ^h$, $tɕ$, qz , $ɣ$, $ŋ$, l などがある。 $ɸ$ 類の形式は c 類と混同される例も少なからずあるが、例によっては発音し分けられる。ただし両類が厳密に弁別されるものであるかは判然としない。本稿では音声情報を重視して記述した。 $tɕ$ 類の音声形式については、先の個別の項目で述べたが、概してこの音素は Bratho 方言の $tʃ$ 類に相当すると見られる¹⁷。また、Ngwirdei 方言では v の出現が非常に限られ、他方言で v で現れる箇所は多く w に対応する¹⁸。

子音連続の形式は、主要なものとして最初頭子音が前鼻音、前気音、口腔内調音子音として唇音、そり舌音、軟口蓋音に分類される。子音連続を構成する組とその数は Ngwirdei 方言の方がはるかに複雑であって、Bratho 方言では最初頭子音が口腔内調音子音の場合、両唇性を伴うものとそれ以外の2系列であったが、Ngwirdei 方言ではさらに細分化されている。黄布凡(1991)の観察において $/s-/$ で始まる子音連続の中で、音声的変異とみなされていた要素は、Ngwirdei 方言ではほぼ異なる調音点の要素 ($ʃ$ -, $ɸ$ -, $ɣ$ -, x -, x -, h -/など。有声性は後続子音にほぼ一致する。) からなる子音連続と対応する。唇音を先行子音にもつ子音連続は両方言に存在することを確認した。Gronyi 方言の場合、子音連続のシステムは極度に単純化されていると考えられ

¹⁷これが音韻表記上の違いであるか、音声的にも異なりがあるのかは確かめられない。筆者はかつて拙稿鈴木(2005b)で同様の問題に出くわしたことがある。鈴木(2005b)はカムチベット語の1方言(Sogpho方言: 甘孜州丹巴県に分布)を扱っているが、その方言にも音声的に $[tɕ]$ と調音される例が見られ、それをいかに解釈したかを簡略化して述べた。

結局は $[tɕ]$ と交替することが多く、その原因を母音 $/v/$ との結びつきと考えたが、 $[tɕ]$ と $[tɕ]$ との混用は Sogpho 方言の南部に分布するグイチョン語において、若年層で $/tɕ/$ と $/tʃ/$ の対立が失われつつあるという記述(黄布凡主編1992)と平行する可能性もあり、その対応と関連性があるのなら、 $[tɕ/tʃ]$ は単に記述に用いる記号の異なりとなるだろう。これを確かめるには、筆者自身による Bratho 方言もしくはグイチョン語の調査が必須である。

¹⁸たとえば、「ぶた」Ngwirdei /-wa/ : Gronyi /-va/ など。

るが、ʔを初頭子音に持つ子音連続が多く見られる。また、各方言で子音連続を持つ語の構成要素（たとえば前気音と前鼻音）が異なる事例が見られる。

6.2 借用語

6.2.1 チベット語来源借用語の音形式について

ダパ語の上位言語としてのチベット語方言は未調査であり、また地域としてもチベット語母語話者の居住地域から離れていることから、ダパ語の中に見られるチベット語来源借用語を通して、借用元がどのようなチベット語方言であったか簡単な考察ができる。Ngwirdei 方言はダパ語の中でもその音素体系と音節構造が複雑なことから、もし現代のチベット語よりも蔵文に近い形で話されていたとするならそれを受け入れられる条件下にあるといえる。対照に用いる現代チベット語方言は筆者の調査によるものに限られる¹⁹。

まず、借用語の語義について考察する。言うまでもなく、宗教文化語彙はほとんどチベット語来源借用語を用いる。

「寺」^hge mbe : 蔵文 *dgon pa*、「白塔」^mtɕ^ho ʂte : 蔵文 *mchod rten*、
「ラマ」^wle me : 蔵文 *bla ma*、「マニ石」^le ʔtse : 蔵文 *la btsas*

以上の形式にも確認されるように、語末の鼻音が脱落しているのはダパ語の音節構造上の制約によると考えられる²⁰。

また、一般の動物名と十二支の場合に用いられる動物名との間に語彙の差異があるものもある。差異がある場合、後者にチベット語対応形式を用いている。

「ぶた」-wa、「ぶた年」^pha^hlu : 蔵文 *phag* (ぶた)²¹

次に、語彙形式の特徴を考察する。もっとも目を引くのは、Ngwirdei 方言の語彙形式が丹巴県の「二十四村地脚話」の形式にのみ一致する例が存在することである。

「鶏」^bdzja, ^bdzea : Sogpho 方言^ʔtse、蔵文 *bya*

¹⁹ダパ語使用地域の周辺で用いられるチベット語方言で調査しているものは、Lhagang (康定塔公) 方言、Rangakha (康定新都橋) 方言、Sogpho (丹巴梭坡) 方言、dGudzong (丹巴格宗) 方言、Grongsum (雅江祝桑) 方言、Lithang (理塘) 方言、gYokhog (道孚玉科) 方言である。最後の1つのみアムドチベット語で、それ以外はカムチベット語である。

²⁰蔵文もしくはチベット語口語の知識がある人の場合、チベット語の発音のように語末に鼻音要素を伴う発音をする人もいると考えられる。

²¹「さる」^zo duj、「さる年」^zo du^hlu のような例もある。

以上の対応は「珊瑚」^ʔtʂa ra : 蔵文 *byu ru* と関係があると見られる。蔵文 *Py-* に対して以上の対応を見せる方言は、非常に限られるのである。

一方で蔵文によく一致しいずれの口語形式にも一致しない形式も存在する。

「狼」^hpja ^hk^hu : 蔵文 *spyang khu*

相当古い借用語かスタウ語経由 (Mazur 方言で *spjon k^hə*) を考えることができる。以上のようなものを除くと、Lhagang 方言に似た形式を持ったものが多い²²。

「米」^mɕe : Lhagang 方言 ^mɕe:、蔵文 *'bras*

「琥珀」^hpuj ɕ^he : Lhagang 方言 ^hpu: ɕ^he:、蔵文 *spos shel*

先に見たように、語末鼻音が消失するのは確かにダパ語自体の音節構造によるけれども、借用元のチベット語が Lhagang 方言や Grongsum 方言など Minyag 方言群に属する場合、もともと語末鼻音が脱落していた可能性もある (鈴木 2006b)。

また、蔵文に見られない形式が口語形式として酷似する例がある。

「唐辛子」^ʔɕu tso : Lhagang 方言 ^ʔɕu tsa

この語は以上にあげた以外のチベット語方言では一致する形式が見当たらず、一種の地域語であるかもしれない。

以上の現象をまとめると、ダパ語の借用元となるチベット語方言は数種類もしくは数経路存在するようであるが、丹巴県のカムチベット語と共通する音特徴をもった語彙形式を借用している点は、歴史的に見て非常に興味深い²³。

6.2.2 最近の漢語来源借用語について

中国の少数民族語話者は、多くが漢語もしくは他の地域共通語との併用を行って生活している。そのような人々の用いる少数言語は、少なからず社会的上位言語である漢語の影響を受けているといえる。ただしダパ語に関して言えば、本来的なダパ人の居住地に暮らす人々は漢語併用率が低く、単言語使用者も少なくない。

ところが筆者の調査協力者は、出身地から县城へ出てきている人であり、教育水準も高いため漢語、チベット文語ともに詳しい。その影響もあって、調査記録には少なからず漢語語彙が紛れ込んでおり、その扱いを以下にまとめる。

²²Lhagang 方言と似ているといえる点は、子音連続の現れによるところが大きい。

²³補足として、この点を歴史文献から確認できることを述べておく。《西番譯語》(川六) = 《木坪譯語》の記録言語すなわち 18 世紀木坪チベット語 (現在の雅安市宝興県周辺で通用していたとされる) には、「珊瑚」について「子呂」という音写漢字が与えられ、*tʂə ra という形式が期待できる。

結論を述べておけば、漢語が漢語としてダバ語の構造に入り込み、借用語と判断すべきものではない、ということになる。その判断の根拠は以下の通りである。

1. 漢語本来のバリエーションが自由変異として現れる
2. 声調が漢語のまま変更されず、特に上昇で終わる形式がある
3. 鼻母音が維持される

1. は、「普通話」「四川話²⁴」「地脚話²⁵」といった漢語本来の社会的・地理的差異が、ダバ語文の中に見られる漢語語彙にもかかわらず、1つの語が許容する変異形の中で自由変異を起こす。筆者の協力者は以上の3種を運用できるため、ダバ語に入っている漢語も、以上の自由変異が可能となる。

2. は、漢語の各バリエーションで実現される声調が、ダバ語の体系にない声調のタイプであるにもかかわらず出現する。

3. も2.と同様、漢語では脱落しない鼻母音がそのまま維持される。

以上のような理由から、先行研究などで行われている「漢語専用の音素を体系に組み入れる」ことは行っていない。以上のような自由変異は漢語の音韻表記におけるずれが見られるため、漢字のままダバ語文に挿入して記述するのがよいと考える。

一方で、完全に定着した漢語来源借用語もあり、その場合には以上のような音声的なゆれが観察されない²⁶。

「食用種子」 kwɑ : 四川漢語「瓜子 kua^{陰平}tsi^上」

「マッチ」 ja xo : 四川漢語「洋火 iaŋ^{陽平}xo^上」

このような場合、借用語の形式はダバ語の音素体系や音節構造の範囲内で現れる。

参考文献

- 白井聡子 (2006a) 『ダバ語における視点表示システムの研究』 京都大学博士論文
 —— (2006b) 「ダバ語メト方言における音素体系と子音連続の相関」 『東ユーラシア言語研究』 第1集 307-323

²⁴ 西南官話のうち、四川省で通用するものの総体的名称である。特定の地域のものというよりは「四川省の普通話」といった性格を持つ。なお、白井 (2006a) には「標準的な漢語四川方言」という表現があるが、これに相当するものであろう。

²⁵ 漢語で言う「土語」に相当する、土着の漢語方言を指す。地点によって音声実態の差異が激しい。

²⁶ 白井 (2006a) には、語形式として漢語であることが明白であってもダバ語話者が漢語来源借用語と意識しないで使っている語があるという。この点に関しては、筆者は調査していないが、ここで取り上げる例は語源として漢語であることという基準に基づいている。

鈴木博之 (2005a) 「チベット語音節構造の研究」『アジア・アフリカ言語文化研究』第 69 号 1-23

—— (2005b) 「チベット語丹巴・梭坡 [Sogpho] 方言の音声分析」『ニダバ』第 34 号 96-104

—— (2006a) 「川西民族走廊に分布するチベット・ビルマ系言語における子音連続—発音様式から見る子音連続の構造—」『東ユーラシア言語研究』第 1 集 287-306

—— (2006b) 「チベット語塔公 [Lhagang] 方言の方言特徴とその背景」『ニダバ』第 35 号 39-47

道孚県地名領導小組編 (1986) 《四川省甘孜藏族自治州道孚県地名録》西南民族学院印刷廠

馮敏 (2005) 〈川西扎巴藏人親屬制度初探〉《康定民族師範高等專科學校學報》第 6 期 1-7

龔蔭 (1992) 《中国土司制度》雲南民族出版社

華侃 主編 (2002) 《藏語安多方言詞匯》甘肅民族出版社

黃布凡 (1991) 〈扎壩語〉戴慶廈等《藏緬語十五種》64-97 北京燕山出版社

黃布凡主編 (1992) 《藏緬語族語言詞匯》中央民族學院出版社

林俊華 (2005) 〈“扎巴”族源初探〉石碩 主編《藏彝走廊：歷史與文化》176-186 四川人民出版社

孫宏開 (1983) 〈六江流域的民族語言及其系屬分類—兼述嘉陵江上游、雅魯藏布江流域的民族語言〉《民族學報》第 3 期 99-273

雅江県地名領導小組編 (1987) 《四川省甘孜藏族自治州雅江県地名録》西南民族学院印刷廠

楊嘉銘等 (1994) 《甘孜藏族自治州民族誌》当代中国出版社

周毛草 (2003) 《瑪曲藏語研究》民族出版社

[付記]

筆者による現地調査については、平成 16-17 年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究 (S) 「チベット文化圏における言語基層の解明」(研究代表者：長野泰彦、課題番号 16102001) の援助を受けている。

[追加事項]

稿成って後、本稿と同じダバ語 Ngwirdei 方言の記述がすでに出版されていることが分かった。劉勇 等《鮮水河畔的道孚藏族多元文化》(2005 年 12 月四川民族出版社出版、すでに稀観本) で、言語を扱う部分は記述は劉輝強・尚雲川両氏が担当しているようである。そこで記述内容と本稿の分析はほとんどの点で一致を見ないため、改めて論じる必要がある。

Esquisse d'analyse phonétique et dialectale en nDrapa le dialecte de Ngwirdei [Hongding]

Hiroyuki SUZUKI

sommaire

Cet article traite l'analyse phonétique et dialectale du dialecte de Ngwirdei, nDrapa, parlé au sud du district de Daofu, Sichuan, Chine. nDrapa est une des langues qiangiques, divisé en deux groupes dialectaux : nDra-stod et nDra-smad. Le dialecte de Ngwirdei appartient au groupe de nDra-stod. Chaque différence dialectologique est comparativement grande.

Il n'y a pas beaucoup d'études du nDrapa, concernant le dialecte de Ngwirdei, cet article est une première description linguistique. L'auteur a éclairci ici les caractéristiques phonétiques suivantes :

1. analyse tonale :

cinq types tonaux, chacun couvre un mot

2. analyse vocalique :

(a) manque de la voyelle nasalisée

(b) existence de plusieurs diphtongues

3. analyse consonantique :

(a) bon nombre de la phonème consonantique

(b) bon nombre du groupe consonantique, deux types du moyen de prononciation

Dans la courte discussion des mots d'emprunt tibétain et chinois, l'auteur a découvert que ceux qui dérivent du tibétain possèdent les caractéristiques du tibétain écrit et de plusieurs dialectes, et que quelques formes lexiques ressemblent à celles du dialecte de Sogpho, parlé au district de Danba. Les nouveaux mots qui proviennent du chinois sont analysés non comme mot d'emprunt mais comme mot chinois inséré.

(受理日 2006年3月31日)